

から乗車ということで、人数は分かりませんが、長い行列で駅に向かいました。どの人の顔を見ても、皆いよいよ内地に帰れるのだという安堵感が表れていました。

乗車した列車はやはり無蓋車。でも新京まで南下したときのように暴徒の襲来もなく、広大な満州の平野を南進。安泰な旅で錦州に着き、収容所に入りここで約一週間過ごしました。アメリカ軍がいて、身体検査、健康診断、そして虱などの駆除のためDDTを全身にかけてくれ、これで虱ともお別れできました。

錦州をたち、乗船場所の壺蘆島へ。港に着き、久しぶりに見る海とそこに待っている引揚船、船腹に大きな日の丸のついた船を見たときの感激は今でも忘れません。「ああこれで日本へ帰れるのだ」と歓喜の涙があふれてきました。玄界灘を越え、広島の大竹港へ上陸、満五年四カ月目に懐かしい日本に帰って参りました。時は昭和二十一年の七月下旬でした。

一番気掛かりだったのは祖父のことでした。しばらくしてから、九月の末ごろに亡くなり、現地の人たち

が日本人墓地に葬ってくれたと聞きました。

昭和六十一年の八月に墓参団に参加して、四十年ぶりに現地に赴き、墓参りをしてきましたが、日本人墓地だった所は、墓の影はなく馬鈴薯の畑でした。畑にお線香とお供え物をあげて、その土を持ち帰りました。半世紀あまり過ぎた今、特に引揚げの道中で助けられ、お世話になった方々に、この頁をお借りして衷心より厚く御礼申し上げ、筆を置きます。

心の故郷満州・十三年の軌跡

宮城県 鈴木郁子

昭和九年八月初め、私たち親子四人は、父に迎えられ初めて大陸の地、大連の土を踏みました。父四十歳、母三十四歳、兄十歳、私七歳、妹二歳、親子五人の希望に満ちた再会の第一歩でした。それから十三年後、この同じ大連の港から乞食同様の姿で帰国しようとはだれが想像し得たでしょうか。

父は仙台の第二師団を退役した後、上官の招きに応じて関東軍の軍属として奉職。一年前に渡満し、匪賊討伐に明け暮れる関東軍の補給をあずかる職務に就いておりました。

私たちが連れて行かれた街は熱河省の凌源でした。凌源は匪賊討伐のために置かれた前線基地で、日本人の居留民二百人ほどの小さな街ですが、交易の要路でした。

朝な夕な兵舎から聞こえるラップは街中に響き渡り、ラップは生活の時計代わりです。兄と私は早速小学校に転入しましたが、生徒数四十三人、先生は二人、高学年・低学年の二部授業です。全くの生活の変化にもすぐに慣れて、毎日が未知のものへの挑戦でした。

兵隊さんたちともすぐに仲良くなり、兵隊さんも遊び仲間です。時として広場のトラックが一台もいなくなり、兵隊さんの姿がどこにも見えなくなります。それが何を意味するのか理解の外でした。時々「家から出るな」と言われ、母の緊張した顔にドキドキしながらも、私たちが置かれている立場を知る由もなく過ご

していたのです。それが、時を経ずしてその実態を知ることになりました。

ある日、悪い匪賊だという人の晒首を目前にしてはどなく、母について行って血にまみれた負傷兵のトラックを見送り、戦死した兵士の火葬の場に出会ったのです。赤くなつた目にハンカチを当てている母の姿にもらい泣きをしながら、もうもうと立ちのぼる煙と、心に染みる葬送のラップの音の中に、幼いながら戦いというものの実態をおぼるげにも意識させられたのでした。

昭和十八年、私は奉天の長沼高女に在籍していました。凌源を翌年後にして、父の転任に伴い錦県に一年いたのち、奉天に来て落ち着き、後は父のみが單身赴任の形で動いておりました。

その間、昭和十二年支那事変勃発、十六年には大東亜戦争に突入、戦果戦果に沸いた時を経て、世の中は何となく雲行きも怪しくなっておりました。

支那事変のころ、内地から続々と送られてくる兵隊さんのために、山海関に在って勤務していた父は、寝

る間もない激務に体をこわし、人退院を繰り返すようになっていました。

一方、私もブランコから落ちたことが原因で、関節を痛め再発を繰り返し病院と縁が切れなくなり、父の勤めの関係で、女性には縁遠いはずの陸軍病院に通っておりまして。手当てを受けるとき、治療の部屋は兵隊さんと一緒です。手のない人、足のない人、果ては赤札のついた担送兵と共に治療を受けなければなりませんでした。父の病室に行く途中にも、名前に赤札が下げられた部屋がたくさん並びます。

当時、学校の教育は戦時色一色、華々しく散ってこそ日本の戦士、戦死も名誉、けがも名誉。しかし戦いというものがこのような方たちをつくることを知った、つらい病院通いでした。

戦局は日に日に逼迫し、十月には学徒出陣によって大学生も学窓を捨てて戦場にかり出されて行き、私たちの同期生の中からも幼年学校へ、予科練習生へと志願して行く人たちがでてきました。私も学校に復学したものの、学徒動員法がしかれてからは授業どころで

はなく、次々と勤勞奉仕に追われる学生生活になっておりました。

明けて十九年、戦況は敗色が濃くなり、同級生の父親たちが次々と召集されて出征しました。一億総玉砕が叫ばれ、私の家にも学徒出身の将校や下士官がよく遊びにきました。が、明るく振る舞う姿の中に、戦うことを余儀なくされた人々の、建前ではない何かを感じられてなりませんでした。

昭和二十年八月十一日早朝、非常召集を受けて出て行った父が十時ごろ帰宅、「ソ連侵攻に備えて直ちに疎開する。十二時までに一週間分の食料を準備、駅に集合。駅で待つ添乗の人の指示に従いなさい。郁子頼んだよ、お母さんを助けてな」。降って湧いたような言葉を残し、待たせてあった馬車で慌ただしく帰って行きました。当時、奉天にきてから生まれた妹がおりましたが、脳性小児麻痺のため七歳になっても寝たままの状態でした。父の心配は何よりもその子にあったのです。

母の背はその子を負うことではいっぱいでした。私と

妹でできる限りの荷を背負い、貨車で二晩を過ごし、十三日の夕刻、朝鮮平壤で下ろされました。その夜、アパートの一室が割り当てられ落ち着いたものの、翌日の晩、空襲を受けて逃げる途中母が捻挫し、夜明けを待って整骨院に行きました。その帰り道です。道路に群がる人と共に聞いたのが玉音放送だったのです。

周囲の様子は一変しました。現地の人々に日本語は無視されはじめました。夕映えの空に日の丸も鮮やかな飛行機が、真逆さまに落ちて行きました。丸腰の兵隊さんが肩を落として、右往左往していました。私たちは予想もなかった事態に呆然とするばかりでした。

しかし、そのような状態も長くは続きません。私たちはそのアパートを追われて学校の教室に集められましたが、学校が始まるとそこも立ち退くように催促される事態になりました。

情報が乱れ飛び、奉天の街はソ連の蹂躪で崩壊したと言われ、米国に占領された南朝鮮からは日本人が続々日本へ帰されているとのこと。皆の心は何とかして三

十八度線を越え、日本へ帰る方に傾いていました。そのような折でした。私たちに付き添っていただく方が、情報を得てきました。満鉄職員のための最後の列車がでる。復員兵がその汽車に潜り込もうとしている。「私もこの家族の状況を報告するために潜り込む決心だ」と言うのです。

母は即座に言いました。「私たちも連れて行ってください」。しかしその方は、「奉天がどうなっているのか分からないのに、皆さんまで責任が持てません」。もっともなことでした。しかし、母は私を促し荷物をまとめに掛かりました。同行の人たちは二分し、残って南下に賭ける者と自分たちの責任でも北上に賭けると言う者とに分かれました。

私たちは即座に荷物をまとめ、他の四家族と共に駅に向かいました。母は満州国の貯金通帳にいくら金が積まれていても何の役にも立たず、冬に向かつての準備もなく、体のきかぬ子を抱えて、三十八度線を越えられる見通しもないまま居続けることに危険を感じ取っていたのです。同じ危険にさらされるなら夫のいる街

へ、もし死んでいるなら骨を拾わなければならぬと、覚悟の上の決心だったので。

駅に駆けつけてはみましたが、貨車に潜り込む余地などあるはずもなく、満鉄の家族の方たちで埋められていました。そのときです。「危険だけど我慢できませんか」と声を掛けてくれた復員兵がいました。藁をも掴む思いで行くと、無蓋車の上に丸太を渡し板を張っただけの場所がいくら空いていたのです。上にいた復員兵の方に助けられて何とか乗り込むと、自分たちが外側になり、中に場所を作ってくださいました。

しかし、昼は隠れようもなくじりじりと陽に照らされ、夜は八月末の冷氣と夜露に震えも止まらず一睡もできません。乗ることだけを急ぎ食料も用意できなかったので、食べるものもなく急速に体力は奪われていきました。合わせて乗車証を持たないので何回も下ろさねえそうになり、そのたびに残り少ない金が消えていきます。

三日目に炭鉱の街、撫順に着いたときでした。燃料

補給のため三十分停車の伝達があり、復員兵の人たちがこの時とばかりに飯盒炊飯をするからと声を掛けてくれました。しかし米は有りましたが容器がありません。「お姉ちゃん、これは」、妹が差し出したのは動けない妹のために防空壕で使えるよう作った便器でした。小さなバケツに蓋がついたものです。何事も寝たきりの妹が中心の生活に、疎開の緊急時にもその中におにぎりを入れて持ち出していたのです。もちろん汽車の中でほかの子供たちにも便利に使われ、感謝された代物です。一瞬戸惑いました。しかしそれを見た復員兵は「たくさん炊けてちょうだい」と、母から米を受け取ると早速自分たちの飯盒と一緒に炊いてくれたのです。

汽車がでるまでに間に合って便器は私たちの輪の中に置かれました。三日ぶりのご飯でした。動き出した汽車の煙突から絶え間なく煙が流れ、煤がゴマ塩をかけたようにご飯を染めていきます。涙で湿らせながら握ったあの時のおにぎりの味は終生忘れることはないでしょう。

その日の夕方、汽車はようやく奉天の駅に着きました。月がかわり九月二日でした。

ホームいっぱいにはソ連兵がたむろしています。恐る恐るその間を縫って出ると、駅前様子は変わらず汽車や馬車のがんびりと客待ちをしていました。

一行の中の一人が馬車を呼び、荷物を乗せて自分も乗ろうとしたその時です、馬に一鞭、あつと言う間に荷物を奪って走り去りました。今更のように置かれた立場を知らされました。

その夜は駅近くの同行の方の家に寄せてもらい、双方の無事を確認し合ったものの、私たちの家は既に暴徒にやられてなくなってしまうことを知りました。

次の日私たちは馬車に迎えられ、父の部隊に隣接する官舎に運ばれました。そこには私たち同様な家を失った部隊長の奥様をはじめ、十家族ほど既に收容されていました。私たちも部隊に所属する一員として拘留されたのですが、それは夜の点灯も窓から覗くことも許されない牢獄のような生活でした。

それでも巷では強盗、強奪、強姦などの狂乱状態に

あったとき、三度の食事の心配もなく枕を高くして寝ていられたのは、並々ならぬ部隊長の強行な交渉があったおかげと聞きますが、幸運としかいいようがありません。

毎日食事を済ませた後は、天井と向き合う生活です。聞こえるのは隊内に引き込まれた貨物列車の行き来する音、ガチャンガチャンと言う連結の音、昼となく夜となくその音は続きます。突然、条約を破って侵攻してきたソ連の、火事場泥棒そのままに物資を強奪してゆく音、私たちの青春を運び去る音です。逆爪に泣きながら包装した薬の数々、動力ミシンのあまりの速さに手指まで縫いながら縫った軍袴やゲートル、どんなに苦しくとも疲れても、これが戦場の兵士に届くのだと、生徒同士で慰め励まし頑張りました。あの頑張りは何だったのでしょうか。腹の底からソ連のやりかたに腹が立ち、むなしさばかりが残りました。それでも、そのような生活は疎開以来の憔悴しきった体を急速に元気づけてくれました。

十日ばかりたったある日のことです。突然、父が来

てあることの決行が知らされました。

私たちが収容された部屋は二階でした。覗くなど言われても退屈に負けて、私はよく裏窓から覗きました。窓から十メートルほどの所に鉄線が張られて、そこには何万ボルトの高圧線が通っているとのことでした。それから更に六、七メートル離れて背を向けて倉庫が並んでいます。貨車はその倉庫の前を通っているようですが、こちらからは見えません。その鉄線を越して荷物を投げ入れると言うのです。

父の部隊には軍隊で使うあらゆる物が保管されていました。敗戦と共にたちまち病院関係は窮地に追い込まれました。陸軍病院でも徐々に医薬品の欠乏が目立ち、事態を知って自ら命を絶つ者が続出したといえます。何とか補給をと思い出ても許可されません。目の前にありながらどうにもならない悔しさはどんなだったでしょう。そこでひそかに盗み出す計画が立てられました。巡察の兵隊は日本では考えられないほどのんびりしたものです。その巡察の兵隊を引き止め、高圧線を止め、一挙に荷を奪おうというのです。ソ連兵の

監視下とはいえ、機械などの操作は以前の要員で占められていました。「もし失敗したら私が腹を切れればいいことだ。途中で奪われるようなことになっても、地元を潤すことになる」と部隊長の決心のもと着々と準備がされたのです。

定刻、私たちは早々と床に就き、息を殺して耳をすましました。表で女の嬌声が聞こえました。巡察の兵隊を籠絡する役を買ってでてくれた女の人の声です。静かになったと思う間もなく頭の下にズンズンと音が響いてきました。やってる。やってる。緊張の中に心躍る何かがありました。

次の日一家族に毛糸のシャツの上下一組と、圧縮脱脂綿が数個ずつ渡されました。シャツは飛行兵用の物で純毛でかなり分厚くできています。編み変えれば大人のスーター三枚はできます。冬に向かいそれはどんなに有り難かったことでしょう。私たちは少なからず溜飲を下げたものの、あれもこれも皆運ばれると思うと悔しさばかりが募りました。

倉庫の中の土までもさらうように運び上げ、ソ連兵

はソ連に引き揚げる日がきました。私たちも拘留を解かれ、新たな生活の場所に引越すことになりました。引越す前日夕食後のことです。将校下士官が外泊

を許されて、家族の元に帰ってきました。疎開以来の邂逅でしたが、それは家族との決別の一夜だったので。人々の心はどんなだったでしょう。今にして思えばよく許可がでたものです。私たちの住居は高圧線の外で、やろうと思えば逃亡など思うままでした。部長の部下にかけた温情と信頼、体を張って交渉決断したその勇氣に、私は改めて畏敬の念を深めております。私たち若い者は決意も新たに髪を切って男装して、次の日三台の馬車に分乗、官舎を後にしました。馬車は一度部隊の正門に回ります。

鉄条網の向こうに今朝別れたばかりの将兵が並んで見送っていました。父たち現役外の者は解放され、私たちの車に乗り込み出発となりましたが、どこを見ても部隊長の姿はありませんでした。軍人の妻として覚悟していたこととはいえ、奥様は一目でもお会いしたかったのではないでしょう。手を振る将兵に応えな

がら、その横顔は寂しそうでした。現役の兵士たちは、ソ連兵と共にシベリアに旅立つ日が明日に迫っていたのです。

新居と定めた鉄西の于巷屯に着いてみれば、家は荒らされてがらがらです。まだ畳と窓が残されていただけ幸せでした。家は八軒長屋、男の人たちは早速外周りの補修です。女の人たちは、隣の家との境が押し入れになっていたので幸いに、押し入れの中をくり抜いて逃げるときの用意です。月が変わって十月になっていましたが、世情はまだ騒然としておりました。

引揚げを始めたソ連兵に変わって八路軍が実権を引き継いだようなものの、にわか仕立ての兵隊も多く、ソ連兵と共に銃を突きつけて強盗・強奪は日常のことでした。次々と押し入られて、分散して隠し持っていた金も食糧も奪われていきます。夜になれば女を求めて右往左往するソ連兵から逃れるために何度押し入れに潜ったことでしょうか。寝る間も靴を履いたままの生活が続きました。

そんなある日のことです。自警団を作り警戒し合っ

ていたなかに、背中に銃を突き付けられてわが家を案内してきた人がいました。「あんたが責任者か、銃刀持っているか調べにきた」。流暢な日本語でしたが銃刀などは単なる口実です。責任者ともなれば金目の物があると踏んだのでしょうか。ばらばらと駆け込んできた数人の男たちによって家捜しが始まりました。たちまち屋根裏に隠した行李が引きずりだされて、中の物が表で待つ車に積まれてゆきます。行李の底から父の双眼鏡と着刀のバンドが出てきました。「これは何だ、こんな物出てきた。刀あるな」。声を聞いて入口の男は銃を父に向けました。「そのような物はとくにソ連に出してない」。首を振る父に男は突然居丈高になり、持ったバンドを振り上げ、はっしとばかりに振り下ろしました。鈍い音が父の背ではじけます。その音とともに私は思わず立ち上がっていました。その時です。「GPU（ゲペーウー）がきたぞー」と、表でだれかが叫びました。男は振り上げたバンドを放り投げると足元の物を掴み取り、慌てて飛び出してきました。機転の叫びでした。

その声がなかったら事態はどうなっていたでしょう。抵抗して命を落とした人は数知れずおりました。私は夢中でした。私は父が打たれる屈辱に耐えられなかったのです。

今にして思えば、敗戦国の民としてその程度の屈辱など屈辱のうちには人らないことでした。それから日を経ずして、私たちの目の前に想像を絶する惨劇が繰り広げられていくのです。

しかしGPUとはどんな権限を持つのでしょうか。白国の兵士でも狼藉の現場を見ると有無を言わせず射殺します。狼藉を働く者にとっては怖い存在でも、庶民にとっては敵ながら心強い存在でした。

私たちの住む手巷屯は南満の重工業地帯といわれた鉄西の南西の外れにありました。当時、急速に買い上げられ造成されたのでしょうか、辺りにはまだ見渡す限りの大豆畑が広がっています。私たちの長屋の前方は幹線道路の十字路になっていて、その一画は大きな広場になっていました。その広場に二抱えもあるような見事な榆の木が立っています。おそらく集落の象徴だっ

たのでしよう。私たちはその広場を「楡の木の広場」と呼んでいました。

十月の半ば過ぎ、道路をはさんだ工員さんの独身寮に続々と人が入り始めました。北満から南下してきた難民の方たちです。

当時、奉天になだれ込んだ難民の数、推定二十八万人と言われましたが、奉天市街に収容しきれなくなつて、この千巷屯にも送り込まれてきたのです。

しかし、残っていた建物は人間の住める状態のものではありませんでした。床も窓も持ち去られ、土間に座る人々はどうして厳しい冬が過ごせましょう。日本人会の人々の手で応急処置が取られました。窓に箆を張り板を打ちつけ、土間には藁を敷きつめるという程度がやっとです。それでも男手のあった人は使役に当たりして、少しずつ改善していったようですが、女・子供だけの人たちは悲惨を極めました。

難民の人たちが入り始めたころ、時を同じくして楡の木の広場に何列もの穴が掘られていきました。凍結を前に死人を想定してとのことに私たちは耳を疑いま

したが、それは正しい判断だったのです。

十一月に入つて一つ二つと塞がっていきましたが、十二月に入つて土が凍結すると穴に入れるだけになり、一月には二段三段と上に重ねられて、上に乗せられた人は地上に放置されたと同様の状態になってしまいました。その間を子牛ほどもある野犬が群れをなして喰い荒らしていきます。遠目にもはっきりと分かるような、まさに地獄絵図そのものでした。

極度の栄養失調と不潔からくる発疹チフスは瞬く間に蔓延し、私たちの地区でも見かねた復員の医師と看護婦や元看護兵の方たちで薬もないままに治療に当たつたものの、医師自身が感染し死亡するという、救いようもない惨事になっていったのです。まさに敗戦の悲劇でした。

一月の初め、私は風邪が長引きリンパ腺切開の手術を受けましたが、それが引き金になって生死の間をさまようことになりました。

気がつけば四月の声を聞くようになっておりました。その間、国府軍と八路軍との攻防の狭間で、私たちの

家も何度も荒らされたようですが私には記憶がありません。

五月に入ると、人々の心は日本引揚げの予想に一喜一憂の毎日でした。

私がほとんど意識不明の間、父たちは餅売りや女の人たちは仕立物などをして生計費を稼ぎ、引揚げに備えていたようです。

六月いよいよ引揚げが始まり、第一陣は難民の人たちでした。第二陣にシベリア抑留の留守家族の方たちが出発しました。部隊長に託された方たちを無事に行ることができて、父はどんなに安心したことでしょう。出発のとき、父は屋根裏の土の中からやっと助かったお金に皆で貯めたお金を加えて、持参できる一人千円ずつを渡しました。しかし、私たち親子が博多に上陸後換金して手にした額は、五百円に満たない額でした。同行の人たちになぜ乗船のときに言わなかったかと責められました。父は笑っているだけでした。皆は残りを破り捨てて帰ってきたからです。

父の郷里に着いたのは八月旧盆の最中でした。しか

し夢に描いた故郷は、自分が継ぐべき家を甥に譲っていたため、父にとっては安住の地にはなり得ませんでした。

不遇の中にも一家の結束の中心だった小兒麻痺の妹が肺炎を起こして世を去ると、安心したように父は床に着き、日を置かずして後を追いました。帰国後二年目でした。

自ら選んだ人生に無念の思いもあったことでしょう。しかし、何ら弁明することも釈明することもなく、静かに世を去りました。

振り返れば私たちの年代は、先人の引いたレールの上をただひたすら走らされた年代です。教えられるままにそれを信奉し、疑うこともなく幾多の若い命を散らしました。教えられ守ったものがすべて無になったときの絶望感は、何にも例えようありません。しかし、命を残した者たちはいかに精神のダメージが大きかろうと、若さと柔軟さで時代の波を乗り切り、幸せを手にすることもできました。

私の戦後の苦難は父母に守られたもので、苦難の中

には入らないものです。父を失って初めて父母が歩んだ道の厳しさむなしさを、身も凍る思いで受け止めております。

平成二年、私は私の人生の分岐点となった「楡の木
の広場」を訪ねました。しかし、やっと探し当てた楡
の木は黒こげになって立っていません。木の根元には
「祠が建って高い塀に囲まれています。かつての煉瓦の
家は取り払われ整地された中、土饅頭が並んだ地点に
立てば土は重油を撒いたように黒ずみ草も生えていま
せん。すんでのことに私もここに眠る方たちの仲間入
りをするところでした。

私は、日本から持ってきた日本酒や菓子を供えて手
を合わせましたが、天を突く黒こげの楡の木に、ここ
に眠る人々の無念の思いを見るようで涙が止まりませ
んでした。

あの動乱の最中、父の元で働いていた現地の人たちが、何人も米や野菜を持って見舞ってくれました。学校ではロシア人、朝鮮人、中国人と肩を並べて学び、国籍など気にもしていませんでした。日本はなぜ銃で

解決しようとしたのだろうと慙愧の思いが胸を圧します。人間が銃を手にしたとき、GPUにみる非業な鬼の姿になります。だれでもなりうることをこの目で見ました。そしてどのような正義に彩られたとしても、陰に泣く人々がでることをも見続けてきたように思います。

父母と共に過ごした満州での十三年は懐かしくも苦しい十三年でした。

命ある限り生きる

栃木県 齊藤 トミ

私の生いたち

私は昭和十年四月、「大陸の花嫁」などと新聞紙上
でもてはやされて、五月には第一次移民団の花嫁とし
て渡満いたしました。

大正三年七月十一日、栃木県河内郡篠井村という農
山村に生まれ、後に町村合併により今市市となりまし